

田辺聖子

ふくろま
文車日記

— 私の古典散歩 —



文車日記
ふぐるま

—私の古典散歩—

田辺聖子

新潮社版

文庫日記
私
私の古典散歩

一九七四年一月一日

一九七四年一月一日 印刷

一九七四年一月一日 発行

著者 田辺聖子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 (業務部) 03-266-5111

(編集部) 03-266-5411

振替東京八〇八

印刷 塚田印刷株式会社

製本 神田加藤製本株式会社

定価 七八〇円



© 1974, Seiko Tanabe
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

■ 目 次

額田女王の恋（萬葉集）	9
むかしはものを（小倉百人一首）	17
あつもり（平家物語）	20
北浜の米市（日本永代蔵）	23
少女と物語（更級日記）	26
男の友情（木曾義仲と巴御前）	29
心あひの風（催馬楽）	35
あね・おとうと（大津皇子と大伯皇女）	38

皇太后のおん靴（昭憲皇太后）	45
十二単（采花物語）	51
年上の女（和泉式部）	54
わが愛の磐之媛（萬葉集）	57
舟と琴（古事記）	70
女の児（土左日記）	73
舟　唄（土左日記）	77
ロマンのページ（今昔物語）	80
恋の奴（但馬皇女）	83
庭たづみ（記紀）	97
さくらの歌（新古今集他）	100
魅惑の男（蜻蛉日記）	103
うまずめ（清少納言）	108

あけぼの・くれなる（主人公の名前）	111
赤珠は……（記紀の神話）	114
玉手の恋（摂州合邦辻）	117
ころもがへ（與謝蕪村）	120
ありがひもなき世間（沙石集）	123
薄幸の皇后（定子皇后）	126
老いゆく君（萬葉集）	129
恋のあはれ（徒然草）	132
夕　　顔（源氏物語）	135
朝光の恋（大鏡）	138
おちくぼ（落窪物語）	141
やさしいサムライ（修紫田舎源氏）	144
大君のみ楯（日本書紀）	147

あやゐがさ（梁塵秘抄）	150
男の出発（阿倍継曆）	155
白き鳥の歌（ヤマトタケルノミコト）	158
蟲めづる姫君（堤中納言物語）	161
ませの白菊（古今著聞集）	164
あーら わが君（落語）	167
浅茅が宿（雨月物語）	171
浮きあぶらの国（古事記）	174
おさん（心中天網島）	177
誇りたかき男（道長と隆家）	180
黄泉比良坂（古事記）	185
さめやらぬ夢（建礼門院右京大夫集）	188
幾山河（若山牧水）	195

忍ぶ恋 (式子内親王)	198
浮世風呂 (式亭三馬)	201
ひとつ松 (市原王)	205
知盛最期 (平家物語)	208
雪ちるや (小林一茶)	213
黄葉夕陽村塾 (漢詩)	217
峯のあらし (小督局)	220
世間胸算用 (井原西鶴)	223
国庁の雪 (大伴家持)	227
ふれふれ小雪 (讃岐典侍日記)	231
失われた夢 (滝沢馬琴)	236
恋の見本帳 (伊勢物語)	241
きつね妻 (日本霊異記)	245

ゆく河の流れ (方丈記)	250
シャロンの野の花 (聖書)	253
これ小判 (川柳)	256
永遠の少女 (紫の上)	260
黄表紙の色男 (山東京伝)	263
ただ狂え (閑吟集)	266
野ざらしの人 (松尾芭蕉)	270
あとがき	276

文^ふ
車^{くるま}
日^{にっ}
記^き

— 私の古典散歩

額田女王の恋

「萬葉集」を飾る、美しい星の一つ——額田女王ぬかたのおおきみという女性の生涯は、謎にみちています。

女帝・斉明は、偉大な息子を二人ももちました。不世出ともいうべき帝王たち——天智・天武の両帝でした。ともに才分に恵まれ、すぐれた意志力と鋭敏な時代感覚をもつ、偉大な王者たちでした。

この非凡な男たちの双方から愛された女人は、なお、非凡といわねばなりません。それが額田女王です。

でも彼女の名は、両帝の後妃の名には記されていません。その生まれた年も歿年も、出自もさだかではありません。そして私にとって、もっとも大きい謎は、この美しい才女は、二人の男の、どっちを愛したのだろうかということです。

額田おのおがはじめて大海人皇子あまのあきみに会ったのは、まだごく若い少女のころでした。そのころ、額田の姉の鏡王女かがみのおおきみは、中大兄皇子なかつのおおえのみこという恋人をもっていました。中大兄はのちの天智帝、大海人はのちの天武帝です。

中大兄は皇太子という地位にありましたが、多端な政務のあいまに、難波なにわの都から、姉妹の邸

のある大和へ通ってきていました。

額田はあるとき、中大兄に従ってきた大海人をひとめ見て心を奪われました。彼女は中大兄の、するどいきびしい雰囲気よりも、大海人の、あたたかな、人を誘いこむような微笑や、おだやかで寛容な人柄にひかれました。

へあたくしは、あなたの思ひびとになりたいの。もうきめたわ、大海人皇子さまへ

大胆で率直な少女の言葉に、大海人は目をみはりました。彼は中大兄よりずっと若く、十八九になったばかりの若々しい青年でした。

へ思ひびとよりは、妃として妻問いにこよう。あなたのお父上、鏡王にへ

と青年皇子は顔を赤らめつついいました。

へいいえ。あたくしは並みの女ではありません。神をお祀りするお役目があるの。お妃にはなれないの。でもあたくしは自由なの。恋をしてもいいの。思うがまま生きよ、とおっしゃったわ。人を恋しても許す、とへ

美しくさかしい姫の唇からもれる言葉の奔放な強さに、大海人はたじたとするばかりでした。

へ誰が、そういったの？ かわいい姫へ

へ神が。あたくしには神の意志がわかるのへ

姫は汚れをしらぬ澄んだ瞳を大海人に向けました。そのときから、大海人は神秘的な恋におちてしまったのです。

へおお、いとしい私のお巫女さん、額田よへ

青年はやにわに少女を抱きあげて、自分の乗ってきた馬に乗せました。

へなんとという人だ、なんとという人だろう、あなたは……好きだ、好きだ、よし、このままどこか

へ連れて行ってしまおう！」

青年・大海人は、今までこんなに驚倒したことも魅せられたこともありませんでした。この少女はなんと一語一語、人の心をゆさぶるようなことをいうのか。

へええ、いいわ、夜見の国へ連れていかれたって平気だわ！」

青年の一鞭で、馬は天馬のごとく野を駆けました。丘を越え、森をかすめ、二人は若い神々のように炎の息を吐いて疾駆してゆきました。たちまち姫の黒髪はとけ、うしろへ長くなびきます。山々は新緑にきらめき、夏の光はめくるめくばかりでした。

額田はつぼすみれや、紫草の咲き乱れる花野で馬から下ろされ、青年の手でやさしく花のしとねに横たえられました。

夢のように過ぎた青春の日々の、なんと迅かったことか。

大海人はやさしく大らかな男でした。額田は男の安らかな愛になれ、二人の間には、十市皇女とよばれる愛らしい娘さえ生まれました。

けれども彼らの恋をひき裂いたのは、年月ばかりでなく、時勢のうつり変り、都の政変のせいでした。

七世紀は疾風怒濤の時代です。中大兄が政権を握ると、革新の嵐は日本中を吹きまくりました。中大兄は弟の大海人とちがって、冷徹で非情の政治家でした。彼はロボットにすぎない孝徳天皇を廃し、その皇子を断罪し、邪魔者や障害物を片はしから追放し、処刑し、窮死させ、大化の改新の理想政治を実現する目的のためには、手段を選びませんでした。

中大兄の両手は、幾人の血に汚れているかしれません。しかし中大兄は、そんなことを顧慮する男ではありません。それより彼には処理すべき政治問題が山積しているのです。

新都の造営、蝦夷えぞの討伐、朝鮮半島との外交折衝……中大兄は、一身に、新興日本の運命を背負って立っている男なのでした。そして彼のよき協力者で、有能な輔佐官ほさきは、弟の大海人でした。いずれも、男ざかりの世代になっていました。

その年月のうちに、恋人たちの運命もうつり変っていました。姉の鏡王女は中大兄と別れ、いまは鎌足かまたりの妻でした。妹の額田も、いつか大海人とあう日は少なくなっていました。大海人が、新たに若く美しい妃を二人持ったせいでもあります。しかしそれ以上に、額田は、斉明帝の宮廷にあって、祭祀や神事など、国家的行事にたずさわる、重要な巫女になっていたからです——額田はそのすぐれた歌才によって、人々の心を統括し、魅了し、宗教的な陶醉にまでさそいこむのでした。

老いたる女帝・斉明は、この神秘的才能にめぐまれた女流即興詩人を、こよなく愛しました。額田は女帝の行幸にはいつも従って、人々の感懷や祈りを代表し、歌うのでした。その歌にはふしぎな魔力がありました。

熟田津にぎたづに船乗りせむと月まてば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

月明の船上、朗々と歌う彼女に和して、どよめきが走ります。船出だ、船出！ 人々の心に氣魄と期待がみちあふれ、船団の緊張は波状的にひろがってゆく……。額田は予言者のごとく女神のごとく、人々の敬愛と注視のまとなるのでした。彼女は宮廷の華でした。

中大兄は心ひかれました。

彼はすべて、強いもの、ぬきんでたもの、すぐれたものが好きな男でした。彼は額田に直截に

迫りました。

へ額田。おれはお前が気に入った。欲しい。欲しいものは奪うのがおれのやりかただ。お前を大海人から奪う。おれを愛せよ

へあたくしは自由です。太子よ。——あなたも大海人も、あたくしをつなぎとめることはおできに
なれませんよ……けれど、ほんとうをいえば

額田はほほえみました。



彼女も、昔の幼い姫ではなかったのです。男ざかりになり、ほしいままに国の運命を切り開いてゆく鉄の意志をもった、堂々たる王者、中大兄に魅力をおぼえていました。

へ太子よ。あたくしもあなたが気に入りました。あなたをえらんだのは、あたくしです。

額田は、中大兄を愛人にもちました。彼女は、そういうやりかたで愛を示す女でした。

斉明女帝が崩御し、中大兄は即位して天智帝となりました。初夏のある日、蒲生野で、大きな遊獵がもよおされました。大海人皇子以下、諸臣が従いました。額田は、この宴の席で、大海人を見て、興をそそられ、歌います。

あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

紫草の咲く野をゆき、御料地の野を、あなたはずんずんいっておしまいになって——ずいぶん、人もなげなおふるまいを遊ばすのですね、袖なんかお振りになって合図なさったりして。野守がみないでしょうか。

大海人はすぐさま返しました。

紫の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

紫草のように美しいあなたを、もし憎かるうならば、人妻なのにどうして私が恋しく思うものか。

人々はどよめき、このやりとりを喝采しました。